

第1章 カザフスタンの概況

(1) 気象、地理

カザフスタン共和国は、ロシア、中国、キルギス、ウズベキスタン、トルクメニスタンに接し、世界で9番目の面積271万7,000km²を有する。国土は東西約3,200km、南北約1,800kmに広がる。(図1-1参照)

同国は半乾燥大陸性気候帯に属し、低温の冬と高温で乾燥した夏によって特徴づけられる。気温は南北差が大きく、1月の平均気温でみると北部では-18℃であるが最南の平野部では-3℃であり15℃もの差があり、7月の平均気温は北から南にいくにつれ19℃から30℃へと上昇する。年降水量は北部地域の150mmから南部山岳地域の450mmへと変化する(図1-2参照)。

国土のおよそ半分は、砂漠あるいは半砂漠の平原や低地であるが、南部及び南東部にはアルタイや天山などの山脈が連なる。北部及び中部地域の半乾燥ステップ地帯からウズベキスタン及びキルギスとの国境沿いの南部地域の砂漠地帯へと変化している。同国には、約8,500の河川があり、その90%の河川は乾期には枯れ川となる。ロシアのオビ川水系に属する大河は、イルティッシュ川、イシム川、トボル川であり、内陸閉鎖湖に注ぎ込んでいる大きな河川は、カスピ海集水域でのウラル川とエンバ川、バルハシ湖集水域のイリ川、カラタル川、アクス川、アラル海集水域のシルダリア川である。

(2) 社 会

カザフスタンの人口は、1999年3月に実施された国勢調査によると1,495万人であり、人口密度は世界で最も低く5.5人/km²である。なお、1999年の人口は前年に比べて62万3,000人も減少しており、ロシア人の大量の移民が原因となった。民族構成は、カザフ人46.0%、ロシア人34.7%、ウクライナ人4.9%、ドイツ人3.1%、ウズベク人2.3%、タタール人1.9%、その他7.0%となっている。

行政区分は14の州(Oblast)と1首都圏に分かれ、州は更に郡(Rayon)に区分される。各州の面積、人口等は下記のとおりである。

表 1－1 州別人口（1999 年 3 月）

州	面積 (千 km ²)	州都	州人口 (千人)	人口密度 (人/km ²)
アクモラ (Akmola)	180.5	コクシュタウ (Kokshetau)	835.7	4.6
アクトベ (Aktobe)	298.7	アクトベ (Aktobe)	682.8	2.3
アルマティ (Almaty) *	223.2	アルマティ (Almaty)	1,559.6	7.0
(アルマティ市)	0.16		1,130.0	—
アティラウ (Atyrau)	112.0	アティラウ (Atyrau)	439.9	3.9
東カザフスタン (East Kazakhstan)	276.9	オスケメン (Oskemen)	1,530.8	6.1
カラガンダ (Karaghandy)	398.8	カラガンダ (Karaghandy)	1,411.7	3.5
コスタナイ (Kostanai)	170.4	コスタナイ (Kostanai)	1,019.6	6.0
グジルオルダ (Kyzylorda)	228.1	グジルオルダ (Kyzylorda)	596.3	2.6
マンギスタウ (Manghystau)	166.6	アクタウ (Aktau)	316.8	1.9
北カザフスタン (North Kazakhstan)	122.4	ペトロパブロフスク (Petropavlovsk)	725.9	5.9
パブロダール (Pavlodar)	127.5	パブロダール (Pavlodar)	805.9	6.3
南カザフスタン (South Kazakhstan)	116.3	シムケント (Shymkent)	1,976.7	17.1
西カザフスタン (West Kazakhstan)	151.2	オラル (Oral)	617.7	4.6
ジャンプル (Zhembyl)	144.6	タラス (Taraz)	983.9	6.8

出典： カザフスタン国国勢調査（統計庁 1999 年）

(3) 経 済

1991 年 12 月の独立以前は、旧ソ連の共和国間分業体制の下で、豊富な地下資源とその半製品及び穀物の供給地域の位置づけにあったが、連邦の解体によって従来の経済体制は完全に崩壊し、流通・決済システムにおけるほかの連邦共和国との経済的な連携が断ち切れ、カザフスタンの生産力は急激に低下した。独立時である 1992 年の消費者物価指数は対前年比 3,000 にも達した。1993 年から世界銀行、国際通貨基金（IMF）などの国際機関と協調し、独自通貨テンゲ（Tenge）の導入、民営化、金融引締め等を柱とする経済の構造調整に取り組み、1996 年にはマイナス成長から脱却し対前年比＋1.1%と独立後初のプラス成長となった。しかしながら、1998 年の経済成長では再び対前年比－2.5%（GDP＝212 億ドル）、1999 年第 1 四半期は－3.6%のマイナス成長にある。なお、国民 1 人当たり GDP は、GDP 成長率自体がマイナスになっているのにもかかわらず、人口が減少したことからプラスにある。

表 1－2 GDP の推移指標（対 1991 年）

内 訳	1991	1992	1993	1994	1995	1996	1997
GDP (国民 1 人当り GDP)	100	94.7	86.0	75.2 699\$	69.0 1,003\$	69.3 1,276\$	70.7
工 業	100	82.9	71.3	51.7	47.3	47.4	49.3
農 業	100	128.7	119.8	94.6	71.5	67.9	66.6
建設業	100	59.5	44.1	36.9	22.9	17.9	19.7

出典：UNDP Human Development Report, 1998

カザフスタンは、鉱物資源に恵まれていることから鉱業と冶金産業が中核を占める産業構造となっている。特に、クロム鉱の埋蔵量は旧ソ連の 90% を占め、水銀、タングスタン、銅、亜鉛についても半分近くの埋蔵量を有している。石炭の埋蔵量も旧ソ連の 20% を占める。しかし、産出量については独立後、最大需要国であるロシアの需要が落ち込んでいることから、大きく減少している。工業部門では、民営化政策の下で生産効率の改善が遅れた企業は閉鎖や倒産を余儀なくされ、取引先への支払いや労働者への賃金支払いの遅延などの問題を生じている。鉱業の中で石油産業が最大であり、1997 年で全工業生産額の 25.6%、輸出額の 30.2% を占め、次いで冶金工業が第 2 位であり、各々、25.4%、32.4% を占める。

農業は、長期間にわたりカザフスタンの経済上重要な位置を占め、就業人口の 20 ～ 25% が農業に従事している。しかし、農業の国民総生産に占める割合は 1990 年から 1997 年までに 34.9% から 10.9% へと大幅に減少した。農業部門の構造的な問題として、農場民営化の結果の不振、農場のリストラの社会的影響、農村金融システムの未発達、農畜産物市場システムの未整備などが指摘されている。国土の 75% が耕地及び牧地で、その大部分は家畜の放牧地として利用されている。耕地は 3,400 万 ha でうち 3,200 万 ha が天水田で 240 万 ha が灌漑農地である。



図1-1 カザフスタン全国図

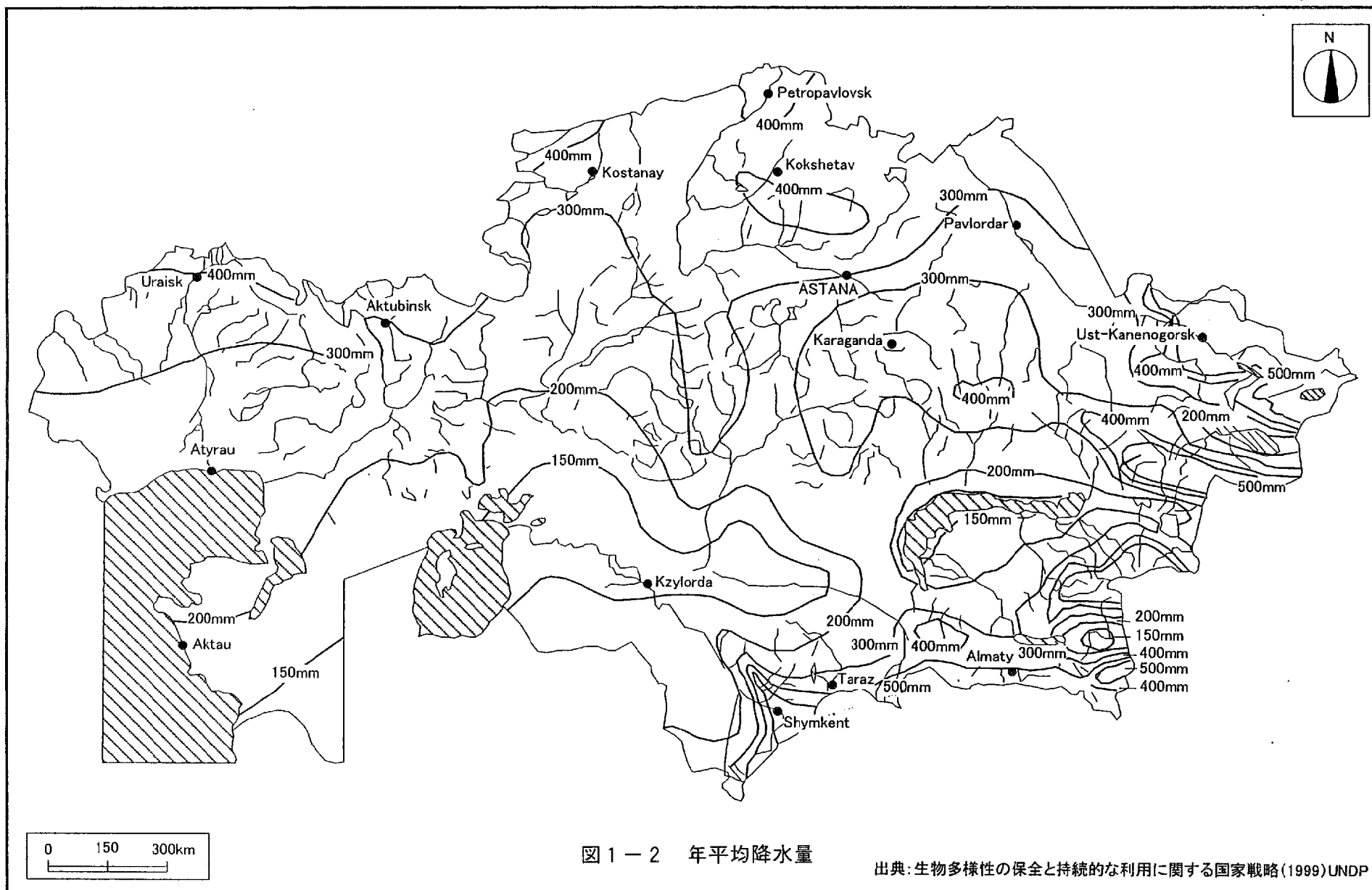


図 1 - 2 年平均降水量

出典: 生物多様性の保全と持続的な利用に関する国家戦略(1999)UNDP